

二十歳を迎えた探検部がある冬の日聞いた話

(初代の O.B 諸氏に聞く)

日 時	昭和51年12月20日 午後7時～午後8時45分					
場 所	太 融 寺					
出席者	初 代	竹 本 靖 秀	19 代	谷 口 喜 勝		
	初 代	渡 辺 吉 和	21 代	河 崎 源		
	初 代	小 野 龍 弥	21 代	釜 田 延 介		
	13 代	松 本 洋	21 代	波多野 敏彦		
			21 代	小 西 貞 義		
進 行	20 代	高木克己	記 録	20 代	西川栄明	
編集責任	18 代	大嶋通弘				

司会 本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。早速ですが、先輩がたと我々の拠点である「探検」というものについて、いろんな方面から話を進めていきたいと思うんです。それで、今のぼくらの考え方というものを先輩に知ってもらいたいのという……。まあ下心なんですけど。

竹本 それじゃ、できたころの話から始めますか。ぼくらの時代は、とにかくどないしたら探検部がうまいとていくかと、手探りの状態やったんでね。まあ、日本中ブラブラしてました。それで、手始めに行ったのが離島でした。

小野 わたしは一年生として入部したんですわ。そのころ、海外へ出ることは、今と違って絶望的なもんでね。そんな時に竹本君らは、京大に続いて二番目の大学探検部というものを創ったわけなんです。だから、離島というでも大変なことだったんでね。それから二年くらいして、山や海やらへ行き出して、まるで何もなかったのが、二十年でこんなに変わってきたんやなあ。この三十年というの、探検部の二十年でもあるわけですよ。

竹本 うぶ声を上げたのが昭和三十三年ですわ。

その当時は、とにかく何かやりたいということで学生というものが非常に前向きやったです。部員も一人一人の個性が強かった。それやから、絶望的な海外遠征でも、どないかして出してやろうと思ったね。そんな時に、京都大学の探検部が大学側から作られてね、教授が学生を海外調査に連れて行こうという形でできたんです。ところが、関大はそうやなかった。我々の場合は、何かやろうとするエネルギーが燃え上って、そんな人間が、100人くらい集まって生まれたんです。

司会 当時は探検部の名前もなかったんですね。たゞ、「何かやろう」というエネルギーの集まりとしてできたわけですか。

竹本 そうですね。まあ具体的に海外へ出たいとか、南米へ行こうというのはあったけど……。

波多野 先輩はどういうことから探検部というのを始めようと思われたんですか。

竹本 あっさきもいったように、我々は何かをしたかったんですわ。それで、みんないろんな部に居たんやけど、そこからはみ出そうとして……。そんなやつが、当時としては冗談としてしか見られへんかったような「南米へ行こう」とかいいた形で集まって、またそれを一から考え直したわけ。この夢を実現させるために研究を重ねて、活動していったんですわ。できた当時は、クラブ

として活動しなあかんということで、まずトカラ列島へ行って、それから次々と難島をやりましたよ。そのあと一年ほどして、小野さんが山の技術をひっそりとやってきて……。

京大はそのころ本多勝一さんがリーダーしとったな。ちょうど朝日新聞に、京大と関大の探検部のことが載って、始めて世間に大学の探検部の存在を知らされたわけですね。

司会 そこで、探検部に山を持ち込んできはった小野さんの、入部の動機を聞かせてください。

小野 わたしは、それまで社会人の山岳会に入ってたんですけど、既存の組織の中で、きまりきった山男になってしまうのでは飽き足らんかったんですかな。

そのころは、部室もなくて、皆丸見屋さんで集まっとったんです。そこへ三年の私が、入れてくれるかな。思て行ったら、受け入れてくれた。いうことです。

竹本 そうですね。丸見屋さんにたむろしてって、とうとう店から追い出されてしもて……。

司会 一年生は、先輩によって創られた探検部という組織に入って来たわけやけど、その入部の意識というのは？

河崎 ぼくなんか、探検部がなかったら、自分で創ってでもやろうと思ってましたし、何かやりたいという考えは同じやと思ってます。

波多野 ぼくは、高校時代、今西純司の本を読んで興味を持ったんです。探検部という組織があるのを知りましたから、その中で自分を変えてみたいという所もありました。

司会 小野さんの場合なんかは、探検部で山をやってやろうと思われたんですか。

小野 一つの時代の流れとしてね、探検部も学術探検の分野に入っていく必要があって、そのためには山もあるし、洞窟も海もあるわけですね。その中にやっぱり得意、不得意があって……。それにもともと山しか登ってなかったから、まず技術研

究会として始めたんですわ。

司会 その辺、同じように山の好きな釜田なんかは、探検部の中の山をどんなふうに見る？

釜田 ぼくはとにかく、今若いんやし、若い時に若い者にしかできんことをやりたいと思って、探検部にきかんです。

それは、山へ行くことは確かに楽しいし、それだけでも充分意義はあると思うんです。けど、一時的な満足に終わってしまってる。それと、フィールドとしての山はほとんど残っていないので、これからは同じ山を目的にしても、その過程で何かやって行くことがあるんじゃないかと思います。

河崎 フィールドが少なくなったとしても、まだやってない所もありそうです……。結局、ぼくなんかは、他人の踏み込んでない面に入ってみるのが探検やと考えてます。最終的には、まだまだデカイことをやる余地はあると思います。

小野 私の構想の中ではね、探検連盟というか、海もあり、山もありの探検部総出の活動というものがありましたね。

現在では、国内では洞窟もボートも、もう探検部としての役割を一通り終えたと思いますね。そんな中でなおかつやってみようとする人たちが、フランスの洞窟へ行ったり、コロラドや青ナイルなどの海外へ出て行ったりするね。パート制を維持して追求して行くと、もう国内には居れなくなっている。4年間という制限付きの大学生活で行なうには無理が出てきたんで、松本なんかは新たな方向を見い出してくれたと思うんですわ。

松本 ぼくの入った時はパート制で、ま、その中で行ったり来たりしてたんやろうけど、計画自体にユークスが出て来ないんじゃないかと思って企画制に変えたわけ。技術が充分あっても、パートから逸脱した者の行き場がなかったんや。

小野 わたしの場合15年間探検部とつながっていて、そこでわたし自身の考えた「探検」というものを次代に、次代に伝えてきたんやないかと思うんですな。君らは、もっと君らの考えで、伝統なんか無視して、バッ！とやらなあかんのやけど、どうしても顔出すと一言いってしまいうからね。

松本 そらもう、アマゾン行こうと計画した時なんか小野さんがOB会長やられて、一言どころか、二言ぐらい多かったね。(笑)きつかったよ。金魚すくいに行くんか。なんて言われて……。

当時の関東探検部は海外遠征ラッシュでね、その時ぐらいから小野さんの意見がグッと威しなっていた。

我々のころの探検というのは、フィールド50%で方法50%ぐらいやったけど、今はフィールド80%方法20%になってますね。そやからもう少し、下の者に探検のおもしろさを教えて、もっと新しい何かをやってみようと思うね。と言って、ボツと出の計画というのは、ほとんどおもしろい計画やないんやね。そやからそんなん全部潰れてしまう。言ってみたら、そんなんがレジャーいりもんじゃないかな。

司会 最近できてきているクライミングのクラブとか、急流下りのクラブみたいなのは、どう思われますか。

小野 洞窟もボートも、世の中に普及させたことで探検部の果たす使命は終わったと思いますね。それでもうあのクラブは山登りにしても、ユニークな方法をやったから、ベースキャンプに入るアプローチに、各々がバリエーションルートでやって来て、それから何らかの対象となる山に登って、また帰りに違うバリエーションルートで帰ってきたね。同じ山登りにしたって、いろんな風に人のやらんような登り方ができるわけですよ。そやからそれが山やのうて、洞窟でもちょっと考え方をやってみると、まだまだ新しいやり方が国内でもあるやろうしね。新たに何かを創造して行くことを忘れたらあかん。そういう点で、熱気球とか風とかね……。あれなんか、今はもうレジャーやけれども、初めてやったらバイオニアやろうな。あらゆるフィールドに見方を変えて見て行けば、まだまだやれることはあるんじゃないかと思います。我々は年を取り過ぎたから、そこまで自分でやってみるわけにはいかんわなあ……。

竹本 あとは若い者に……。やね。(笑)

小野 そりゃ岩を登って、下りはパラシュートで

バーンと降りたら、そら早いで。(笑)まあ、そういうことをやってみても、あんまり社会的意義なんかはないにしても、自分としては、やったという気になる。今みたいに、科学の進歩が止まっている時は、そういう遊びも止まってしまうけどそれをいかに複合して新しい価値を得るかということやね。

司会 その社会的意義とか価値なんですけど、よく探検の一つの要素みたいに一般に言われて、その実、実態関係している我々は何のことかわかんかったり、むしろ厄介者の感じが強いんですけど……。

松本 そんなものは我々のやったことの後から付いて来るもんやと思うからね。誰でも最初からそんなことを考えてないし、考えてたら何も出来るわけないわね。意義づけなんか、かってにどっかでやってくれるよ。必要だったら、OBの人の認め方とかいう解釈のしかたやな。

小野 社会的意義なんかよりも、やはりやりたいことをやってみるのが一番やね。また、それが人のやったことの繰り返しやったら、探検部の意味はないけどな。

司会 現役の方はどうかいな。親の理解とか……。

波多野 いつも言われますねんけど、ボートのトレーニングでオール担いどったら、親が、はよ家へ入りなさい/言うて……。 (笑)それで、今日は何してきたんや。言われて、これでボート漕いで来た。と説明したら弟に、兄ちゃん遊びみたいなことばかりやってんねんなあ。と言われます。合宿でも学校休んで行ったら、必ず、あんた勉強もせんと……。と来ます。自分では、成長したと親に言ってるんですけど、やっぱり学術探検とか人に役立つことをしなさいと言われます。

河崎 やっぱ、やめろ。やめろ。と言います。探検部をやめたら、代わりに10万円くれると言うて……。 (爆笑)

小野 まあ、やめろ言われてやめる人なら、生き

ても値打ないわな。

司会 やっぱり親にしても、社会にしても、学者の行かう調査活動みたいなものを期待してるようで、学生の活動はレジャーやと、決めつけられ易いですね。

小野 関大には自然科学系や、そりいった分野の研究がないから、学術的な活動を……。と思っても、意識する、しない、に関わらず、アドベンチャー——指向になってしまうわけです。

松本 小野さんはね、覚えたはれへんかもしれんけど、学術探検は関大のやることやない。と我々に言われたこともあったけど、ぼくはそうではないと思ってたわけ。そんなら、学術とは何ぞや？という疑問があったんよ。教授なんかがあっちこっち行ってるけど、どこまでやってるんか、学生という立場は教授に比べて、どういふ点で有利か。その結果、期間やアプローチなんかの点から、学生のやれる学術探検があると思てたね。

小野 それは、私も否定するつもりはないよ。せやけど、学術的なことをやって、ずっと研究していく場がうちの大学にないからね。

松本 当時は、体力的に京大より勝ってたから、学術面も勝ったろ！という気もあったね。

小野 その意味では、アマゾンの報告書なんか大したもんです。俺はもう、こいつのやったことに全面的に敬服してる方ですからね。会社廻りなんかも2年でちい前前からあっちこっちへ行って、夜はラーメンの屋台ひっばってね。こいつのんは、社会的意義があったと思うよ。帰ってからでないとその値打は出ないもんやけどね。クラブのバッ

クアップも少なかったのに、あれだけのことをやってきよったんやから……。最初はあんな所へ乞食しに行きよって……。と思ったからね。(笑) 松本 OB会から金一封が出た時、5万円はあると思てあけたら、一万円だけやもんね。それと新幹線の切符だけやった。アッ！切符と違て、「新幹線に乗りましょー」というパンフレットやったな。(笑)俺、もうびっくりしたね。

そやから会社廻りなんかメッタやってるよ。今行ってる所なんかみんなあの時のやもんね。

司会 会社廻りというのはどうかな？というて、よく問題になるんですけど……。

松本 俺なんか会社へ援助してもらいに行くのは要するにこの目的をやらなあかん。という自分の意義の確認やと思てたね。

司会 ところで、創部当時のことなんか聞かせてもらえますか。

竹本 とにかく大変やったね。皆張り合ってたから、部活動以外にでも、いろんな面で野生的というか、そんなことがあってね。大学側も、封建的な体育会はなかなか受け入れてくれへんかったけど、8〜4年して、よりやく部室をもらえた時は、ほんとに嬉しかったね。

河崎 始めは技術なんかなかったわけでしょう。それをどういふ具合に吸収されたんですか。

小野 まず、判らんことは本を読んで研究しましたね。それに、いろんな先生の所へ行って、いろ

まず感じたことは、すでに出来上っている探検部にいる我々と、無から探検部を創り上げた。初代諸氏との間に、探検に対する考え方の相違が多少あるにしろ、それは創立20周年の歴史そのものであり、そこには20年間変わらない探検に対する熱い情熱と打ちまみれた若さがあるだけだ。今後とも、創造的精神を忘れずに、未知なるものに向って行きたい。

いろいろ聞きましたよ。

洞窟の縦穴用の梯子を作った時、最初ビニロンのロープと極木で、近藤さんなんかと一緒に、50メートルほど並べて、あっちへ走ったり、こっちへ走ったりしてロープに木を通したんやけど、それが使ってみたらえらい伸びよってね。それで、どうしたらええか言うて、京大の吉井先生の所で聞いたね。それで、ワイヤー梯子とかケイビングスリングを見せてもうて研究したよ。山へ行ってもあのころはナタ持って、木切って飯炊いとったんやからね。今頃流行してるブタックザックなんか、中型のキスリングのサイドを外して、改良して持って行ってましたよ。何でも自分で開発して目的に合わせてよと思ってね。

竹本 調査方法にしても、関大は自分らでやらざるを得なかったから、創造性が生まれて来たんやね。だから、今までのOBの活動からいいものを現役諸君が吸収していくことも大切やと思ふね。

小野 コロラド遠征の時でもことへ月に2回ぐらいで集まって、テレビのフィルムを借りて挟したり、ボートでも、こんなやつたらあかん。とかでいろいろ研究して、改良してましたね。

松本 あの時は新しいもんがようけありましたね。エンジンの使用とか、ボートの帆布なんかもこれまでなかったですからね。

小野 目的がある。ということばな、いろんなアイデアも付いて生まれますよ。何かやるという事を先に決めんとね。たゞ、企画だけ出して、そこに居るだけじゃいかんね。あとは部員の協力で計画はうまく行きますよ。

部員いうても、このころはえらい少なかったけど……。

小野 我々の時は、入試の時と合格発表の時とその都度パンフレット配ってね。昔の外苑いうたら草ばかりでね、そこでテント張って、まあ泊まり込みでやりましたよ。

松本 今なんか勧誘がどっつい少ないね。

俺なんかの時は企画制になった時で、その企画ごとに勧誘に廻ってって、どこ行っても探検部ばかりやった。そやから、やっぱりようけ入ってきたよ。

司会 それでは、一概に現代の大学生の傾向だけじゃなくて、勧誘の努力が足りんということ……ですね。

松本 そういうことやね。

今の一年なんか、何かやろうと思ってた次の一年に期待しなあかんわけやし、それにはバンバン新人を入れなあかん。探検部に入ってきたというよりも、自分の計画に入ってきたと思ええわけや。

小野 4年間で何かでっかいことをしようと思うんやったら、1年の時に自分なりの考えをまとめて、それから子分を増すんですよ。それで、自分の技術も磨いて、同時に子分の面倒も見えてやるだけの情熱を燃さんとね。

まあ、地道な努力が必要やね。関一の波多野なんかがようけ子分を連れてこんど……。(笑)

松本 実際ね、今どき探検部に勧誘されても、何をやるんか判らへんわけよ。その中で、こういうことをやるんや。という具体案を出してやらんと新人は判らへんよ。

人数不足を嘆くんは、結局君らが悪いんよ。とにかく、皆が傍観者やなくて、自分からやって行かん……。部員の少ないのは確かやけど、その代り、1年の後半あたりから計画の中心になってきて、個人的自覚は上がったと思うね。

ところで、最近の1年は、入ってきた時はものすごく元気やけど、秋になると急に静かになるんや。何んでかな?……現実が判っておとなしくなるんやろね。何かしなけりゃいかんと思うけど、それがでけへん。何もでけへんから何も言ええんところやうか、思てね。

司会 それは、私自身も感じる所ですが……。

実際に、人数不足を嘆いたパート制から企画制への移行の中で、今までの技術がなくなってきたから、やりたいことがあっても、それだけのお膳立てがないんですね。

小野 それは言えますね。部員の数が減るということは、質の問題は別にして、結局クラブとしての力が落ちるわけですよ。人間が少ないうから、いろんなことを兼ねてやらないかん。つまり、専門でやる人がいなくなるんですね。

これからは、要するに部員が何を望んでるかということ、最大公約数を取っていくしかないと思うね。

司会 今のぼくらは、まなクラブというものがあって、その中で何らかの企画を考えて行くという傾向で、創部当時と今のぼくらとはかなり異なると思うんですけど……。

竹本 現実にはタッチしてないから、詳しいことはよく判らんけど、とにかく20年続いたというレールの上を走るのは、ぼくらにとっては羨ましいね。しかしレールの上に居る者にとっては、また難しいかもしれんけど。

司会 ぼくらは、そのレールの上であぐらをかいてたらいかんして、新しいことに目を向けようとしてるんですけど、やりにくい面なんかないか？

波多野 よその人に、探検部に入ってます。いうたらぶっつけあいように思われるけど、自分ですらそんな大きなことしてへんわんし、「関大探検部」いうのが気になることがあります。

河崎 伝統の重みいうものは感じます。そやからあんまり小さいことはできんと思って……。

渡辺 それは大きな間違いやと思ひよ。今、一つ

のレールがあって、その上を一直線に走るというのは、はっきり言って探検部の部員のすることやないと思うんや。ほとんどの部員であれば、自分のカラーいうもんを出して欲しいね。アドベンチャーいうのは、今やどこでもやっとなけど、アドベンチャーやない他のことはなんぼでも散らかさるわけや。それにぶつかるとは、個々のカラーであって、若さであるんよ。それが失敗しても、これやノと思うのんで、どんどん進んでほしいね。

「探検」というものに対する考えは、十人十色やし、探検活動に対する意気込みを肌で感じて、皆カラーを出して欲しいということですよ。

司会 現在の現役の活動を、どんな風に見られますか。

竹本 我々の時と今と、いわゆる「未知への探求」という気持ちは一緒だと思うね。たいてい、20年違っていると、それぞれの年代の背景が段階的に変わってくるからね……。でも、一つの「未知への探求」への手段が探検活動であるということ、ずっと続いてる。ということに創った我々としては、非常に嬉しく思うわけですよ。その背景によって考え方が変わってきてもいいわけですよ。創った人間にしてみたら、続くということに一つの満足感があるわけだから。それと、また別になるけど、探検委員長の本一の筋があったから、非常に事故が少なかったね。その二つが、大きな満足ですね。

司会 今後、探検部の方向が変わるうが、「未知への探求」と「安定面の配慮」は欠かすことのできない、つまり探検部の柱ということですか。

OM麻雀センター

梅田 OS劇場向かい側
TEL (06) 312-9947

竹本 それと、あとは若さやね。

小野 今の君らはね、何か新しいことをやろうと思ったり、技術を得ようと思うんやったら、現役はもっとOBを引っ張り出さないかんわ。それでなかったらOBも年を取ってしまうし……。

竹本 それは必要やと思うね。探検部のOBは、一人一人がいろんなことをやってたんやから、君らが何かやりたいと思ったらね、そんなことに興味を持ってたOBを探して、毎晩飯時に行って話を聞かせてもらったらええ。そこでいろんな知識を見つけて、そのあとで、自分のやりたいこととか、方法とかの糸口を見つけて、最もいい企画にしていけばいいんや。

そういう面で、OBという資源をもっと活用していかなあかん。

司会 何か最後に、先輩がこれから我々に、注文とか、こうしたらいいんじゃないか。というのがありましたら……。

渡辺 結局、探検部の活動いうのはね、行く前にバカにされようが、結果さえ良かったら、いろんな所から、いろんな形で援助してくれますよ。

我々の時でも、トカラ列島の計画に情熱をぶち当てて、一生懸命やったことが、帰ってからいろんな方面から援助を受けて、それなりの理解をしてくれたんですよ。

そやから、あくまでも結果を恐れず、どんどん前へ進んで欲しいということです。

小野 まず、自分が何をやりたいかという、しっかりした考えを持つことですよ。目標さえしっかりしていれば何でもできますよ。その上で、いろんな所に散らばってる知識を導入してきて、研究していけばいいんですよ。

松本 逆に現役がOBに何を望むかも聞きたかったね。金を出してくれとかね。俺なんか、OB会がもっと金を持っとったら、OBの力で現役を3ヶ月か4ヶ月遊牧民の中へ放り込んでやったりしたらおもしろいやろなあ、と思ってるんよ。まあ、

実際には全然金がないけど。

これからは、当り前の計画やないことをやって欲しいね。ファ。こんなんやるんか？というて、こっちがドキッとするような計画をどんどん出して欲しいね。

司会 どうもありがとうございました。何か、座談会のつもりだったんですけど、先輩の話を聞く一方で……。でも、すごいええ勉強になりました。これからも若さで、バンバンやって行きたいと思っています。現役も早速先輩の家へお邪魔させてもらって、御馳走になりに行こうか……。〔笑〕

時間にもなったようですし、それでは、また別の機会にこのような場を設けさせてもらいまして、ゆっくりお話しできたらと思いますので、その時はよろしくお願い致します。

どうもおつかれさまでした。

